

現代と 禅仏教 の対話

岡島 秀隆

①

米国の哲学者エリック・

ホッファーはこんな言葉を

残している。「一九六〇年

代には、変化がきわめて急

速に進行した結果、現在と

いう時がほとんど存在しな

くなった」と。忙しい世の

中である。現代が言われる

ように変化スピードの加速

とともに現在が消失し、ひ

いては過去と未来の曖昧化

が進行する時代だとする

と、現代人の憂鬱やストレ

スの源はそこにあるのでは

ないかと考えさせられる。

の起点を回復することであ

る。自己の存在の根拠はそ

こにある。禅仏教にいう

「己事究明」とはある意味

で自己の現在を見出すこと

である。

それでは、坐禅（瞑想）

「現在」が消え 不安な日々

坐禅で取り戻す「安心」

とつながっていると感ずることがある。自己と環境世界の境界面が薄れて自己身心が世界を直感し、その先

で人間理性は宇宙を直観する。この身体感覚は未知の世界の直観に連動している。

坐禅は自己と世界の「つながり」を確認する簡易装置である。さらに、このベクトルを逆にたどると、人間は自己能力の有限

と自己世界の限界を自覚することになる。このこと

して支え合って生きていることの体認と自覚はわれわれ自身を救済する。

ところで、現代の環境論に「ポイントオブノーリターン」という言葉がある。

それは地球の自然環境が人間の関与をストップさせても自力回復不可能な状態になる時点のことを言い、すでにカウントダウンは最終

段階に差し掛かっている。道元は「愛語は世界を動かす力を持つ」といった。愛語は慈しみの心から生まれ

る。それはつまり、われわれの心が世界を動かすということだ。しかし、その心

救い難い過ちを犯す。自然界には非情な弱肉強食や過酷な自然災害の試練が待ち受けている。それでも坐禅

体験で獲得される世界への信頼は、われわれの「安心」を増長する。道元は「只管打坐」を説いた。只管に坐れば、その姿がそのままに

仏である。「行仏の思想」を説いたこともある。「仏と共にある安心」は現代人の心にも響き共鳴し共感を

与えるように思われる。さて、刺激と休息という現代人の二つの要請に、禅

仏教がどのように応答できるか考えてみた。前半は言葉の創造性を再考しようとした。ボードリヤールの指摘する模造・コピーの蔓延

する現代に独創的な自前の言葉の力を再発見できないかという切なる思いがそこ

にあった。後半は坐禅体験の癒し効果を上げたい。不安とストレスに囲まれた日々を少しでも居心地よく暮らしたいという願いがそこ

にあった。科学哲学など新たな動向を含む現代思想と禅仏教の対話は、これか

らも今日的課題に多くの有意義な示唆をもたらすと思う。（おかじま・しゅうり

ゆう）愛知学院大教授）

とはどのような体験なのだろうか。釈尊は暁の明星をおおきく見て悟りを開いたとき「我、大地有情と同時に成道す」の言葉を残したと伝えられる。それは坐禅を通して釈尊の身心が世界とのつながりを体得したことと謂うのはなかったか。後に中国では「尽十方界真実人」の語によって悟境を吐露した禅者もあった。坐禅をする、自己身心が世界

は、人間の宗教的謙虚と世界への畏怖を思い出させる。また、坐禅は自己と世界および他者との共生を実感させる。この共生の原体験は現代人の原点回復である。坐禅の体験は尾をひく。そして、みんながつながっていると感ずること、ひとりではないと実感することは現代人の「安心」の原点である。互いが競い合うばかりではなく、同朋と

は単なる同情心や漠然とした共感から生まれてはならない。一人一人が自然との触れ合いの中で、花鳥風月を心から愛おしく思わなければ本物ではない。坐禅中の蟬の声や風のすさる音は心にしみる。坐禅体験は世界とのつながりを実感させる。現代人に欠けているのは、この世界や他者への慈しみの実感なのかもしれない。人間は時として残酷で